

# ひとりで『第四の嘘』を書く —アゴタ・クリストフ「双子三部作」の欲望を「書く」ことについて—

戸丸 優作

## 要旨

« La trilogie des jumeaux » écrite par Agota Kristof est une histoire mystérieuse qui dérègle les conventions de la lecture. Elle commence par *Le Grand Cahier* où se révèle la morale de ces jumeaux qui accomplissent des actes cruels. Ce *Cahier* est suivi de *La Preuve* qui nie l'existence des jumeaux, et la trilogie s'achève par *Le Troisième Mensonge* qui fait allusion à l'impossibilité de déterminer s'ils sont de vrais jumeaux. Bien que le premier tome affirme que « la composition doit être vraie », la trilogie ne cesse de mentir. Afin de ne pas être avalée par l'avalanche de ces mensonges, la structure du récit (que les jumeaux ont brouillé exprès dans leur narration) exige d'être rétablie. Ce qui aide à effectuer ce rétablissement, c'est le fait que Kristof a écrit tous ses romans en français qui n'est pas sa langue maternelle. Son français revêt donc un style simple qui narre tous les événements au présent. Par une lecture attentive de la narration, et à l'aide de quelques notions de psychanalyse, on réussit à découvrir le *sub-text* qui se cache derrière ces mensonges. En conséquence, il se révèle que les jumeaux ont écrit le journal afin de réaliser leurs profonds désirs de se séparer l'un de l'autre et de devenir un être seul et indépendant.

**キーワード：**フランス語文学，メタフィクション，欲望を「書く」，物語論，精神分析

## 1. はじめに

アゴタ・クリストフの双子三部作は簡潔な言葉の中に幾重もの襞を忍ばせ、一貫した読みを狂わせる謎めいたテキストである（*Le Grand Cahier*の「ぼくら」に言わせると、この言い方にも問題があるかもしれない）。「作文の内容は真実でなければならない」と表明した「ぼくら」の物語 *Le Grand Cahier*（以下『悪童日記』とする）は *La Preuve*（『ふたりの証拠』）、また *Le Troisième Mensonge*（『第三の嘘』）と続くに従い、嘘に嘘を重ねていく。残忍な行いも厭わない双子の鋭利な倫理意識を見せつける第一作に始まり、双子の存在を否定する第二作、それまでの謎解きを装いながらも双子の真実の決定不可能性を仄めかす第三作。この三部作はフィクションのフィクション性を暴露し、真実というものの繊細さ、脆弱さを物語る、などどいった総括を数多の嘘によって無効にする。

だが、この物語は双子自身が書いているのだった。そうであれば、嘘をついているのは双子自身であるということになる、つまり双子自身の書く物が嘘の物語内容として現れているのだ。このことに着目し、本論文では三部作のメタフィクション構造を解きほぐし、嘘が背後に隠している双子にとっての「書く」行為の意味を分析する。

三部作は一方通行的な読みを求めているのではない。それを作者が意図していることは第三作『第三の嘘』によって明らかにされていると言える。この『第三の嘘』に書かれている書くことの意味を踏まえて、第一作『悪童日記』の三部作における位置付けを捉えなおすことが出来るだろう。そこまで辿り着くための方法としては何よりもまず精読を通して兆候的箇所を明らかにすることである。嘘の奔流に呑み込まれ翻弄されない為には確実な足場を少しずつでも築いていくことが重要となる。

とはいえ、嘘の上塗りをした上にさらに上塗りしている三部作の構造は捕らえ所の無い魚のようであり、捕まえたと思うと手元からすり抜ける。どうせなら、この魚とともに泳ぐのも悪くないのかもしれない。

## 2. 「ぼくら」の様態

双子三部作の分析を開始するにあたり、第一作『悪童日記』の語り手である双子のあり方から始めよう。『悪童日記』は戦禍を逃れ「小さな町」の外れに住むおばあちゃんとともに暮らすようになった双子の物語である。自分達が遭遇した様々な出来事を双子は作文として書く。一つの話は2ページから3ページの短いものであり、その62の話の集積が一つの物語を形成している。そして、これらを物語るのは作文の作者としての双子である。第一話「おばあちゃんの家へ到着」を参照しながら、語りの構造を確認しよう。双子とその母が母方の祖母の家に着いたところから話は始まる。お母さんが先におばあちゃんと話をつけるため、双子を庭の門の所に残して家の中に入った後、双子は少し待ってから見つからないように行動を開始する。

ぼくらは少し待つ、それから庭に入り、家をぐるっと回って、声が聞こえる窓の下にしゃがむ。

Nous attendons un peu, puis nous entrons dans le jardin, nous contournons la maison, nous nous accroupissons sous une fenêtre d'où viennent des voix. (LGC, p. 9)<sup>1)</sup>

語り手である双子は物語の中で「ぼくら nous」として現れ、双子のどちらかが「ぼく je」と発話することはない。双子は個別の名前を与えられておらず、双子を分けて述べる必要のある時は「盲と聾の練習」の話の「ぼくらのうちの一人が盲人の役をし、もう一人が聾者だ L'un de nous fait l'aveugle, l'autre fait le sourd」のように (LGC, p. 41)、l'un de nous や l'autre として、どちらがどちらなのかかわからないようにしか指示されない<sup>2)</sup>。ま

た、物語後半で刑事から暴行を受け投獄された後、双子は体の状態を以下のように説明する（「牢獄」）。

体のいたる所が痛い。ほんのちょっと動くだけでも半分意識を失う。ぼくらの目は潤み、耳鳴りがして、頭はがらがらしている。喉がひどく渇き、口の中もカラカラに干上がっている。

Nous avons mal partout. Le plus léger mouvement nous fait retomber dans une semi inconscience. Notre vue est voilée, nos oreilles bourdonnent, notre tête résonne.

Nous avons terriblement soif. Notre bouche est sèche. (LGC, p. 115)

ここでは双子は二人の身体感覚まで同一のものとして語っている。「ぼくら nous」という人称を徹底して用いることにより、双子は二人で一人という幾分奇妙な現れ方をしていることになる。さらに分析を続けるため、先の「おばあちゃんの家へ到着」の話に戻ろう。双子は窓の下にしゃがんで母と祖母の会話を盗み聞きしていた。

お母さんの声、

「うちにはもう食べる物が何もないの、パンも、お肉も、野菜も、牛乳もないの。何にも。子どもたちに食べさせてやれないのよ。」

別の声と言う、

「それで私を思い出したって訳だね。十年もの間、忘れていたっていうのに。帰ってきたこともなければ、手紙だって寄越さなかつたくせに。」

La voix de notre Mère :

— Il n'y a plus rien à manger chez nous, ni pain, ni viande, ni légumes, ni lait. Rien. Je ne peux plus les nourrir.

Une autre voix dit :

— Alors, tu t'es souvenue de moi. Pendant dix ans, tu ne t'étais pas souvenue. Tu n'es pas venue, tu n'as pas écrit. (LGC, pp. 9)

声に分かっている母が喋る時は「Notre Mère dit」としているが、双子がまだ知らないおばあちゃんが喋る時は「une/l'autre voix dit」となっている。つまり、窓の下で家の中を覗いていない双子の立場から、「声が言う」と表しているのだ。そして、おかあさんからおばあちゃんを紹介され、おばあちゃんが自分たちの目の前で喋る時は「おばあちゃんと言う Notre Grand Mère dit」となるのだ。このように、語りの視点は一人称複数の外に出ることはなく、常に「ぼくら」の側にある。さらにここまでの引用から明らかであるが、双子は現在形を用いて語っている。このようにして「ぼくら」はそれぞれの場面

を細かく描写しつつその中を動き回る。再現性にあふれた展開を見せる物語には要約としての語りは存在しない。

また、物語の大部分は直接話法で表されており、双子の視点から人物の行動や様子、台詞を客観的に描出しようとしている。これを良く表している例を「紙、ノート、鉛筆を買う」の話から引用しよう。お金を持っていないにもかかわらず、双子は文房具屋に行き、紙、ノート、鉛筆を買おうとする。そこで店主はお金がないなら売れない、両親にもらってきたさい、などと通常の対応をする。それに対し、双子は両親と離れてお金を持っていない祖母と一緒に暮らしていると言い返すが、それでも店主は突っぱねる。その直後の場面を引用しよう。

ぼくらはそれ以上何も言わず、店主をじっと見る。彼もぼくらを見る。彼の額は汗で濡れている。しばらくして彼が叫ぶ、

「そんな風にじっと見るなよ！出て行ってくれ！」

Nous ne disons plus rien, nous le regardons. Il nous regarde aussi. Son front est mouillé de transpiration. Au bout d'un certain temps, il crie :

— Ne me regardez pas comme ça ! Sortez d'ici ! (LGC, pp. 30-31)

双子は自分たちの行動と相手の行動や様子しか語っていない。店主の額に浮く汗や店主が大声を上げていることを客観的に語ろうと努めている。ここで汗や大声、「出て行ってくれ」という言葉から、店主の動揺や不快感を読み取るのは容易であるが、『悪童日記』ではここに挙げた例のようなやり取りが最後まで続くのである。その結果、地の文で双子が自らの心情を吐露したり、相手の気持ちを推測したりすることはない。読者はそれぞれの話を読みながら、行動の背後に想定される心情をその都度汲み取らなければならないことになる<sup>3)</sup>。

ここまで述べてきた語り手としての双子のあり方や語りの構造は作文の決まりによって性格づけられている。双子が『悪童日記』の内容を為す作文を書く上で従っている決まりは以下の様なものだった。

ぼくらには「良い」「良くない」を決めるためのとても単純な決まりがある。作文は真実でなければならないというものだ。ぼくらが書くのは、あるがままの事がら、ぼくらが見るもの、聞くもの、すること、でないといけない。(中略)感情を定義する言葉はとても曖昧だ、なのでそれらを使うのは避け、事物、人間、自分自身の描写などのいわゆる事実に忠実な描写だけにとどめるほうがいい。

Pour décider si c'est « Bien » ou « Pas bien », nous avons une règle très simple : la composition doit être vraie. Nous devons décrire ce qui est, ce que nous voyons, ce que

nous entendons, ce que nous faisons...Les mots qui définissent les sentiments sont très vagues ; il vaut mieux éviter leur emploi et s'en tenir à la description des objets, des êtres humains et de soi-même, c'est-à-dire à la description fidèle des faits. (LGC, p. 33)

こうした戯曲の台本の様なルールによって、常に現在時を共に動く双子のあり方や、双子と共にそれぞれの場面に遭遇し事件を体験するという語りが規定されているのがわかる。しかし、体験したことを書く場合、通常は回想する時点から過去形で記述するものであり<sup>4)</sup>、ぼくらが書くのは「見ること」「聞くこと」「すること」だと言っているのは奇妙なことである。これを踏まえると、双子は自らが体験したことを書いているのではなく、これから起こるかもしれない出来事（あるいは現実には全く起こらないかもしれない出来事）を想像して、作文を書いているのかもしれない、とも考えられる。ということはずで『悪童日記』の中にも嘘が忍び込んでいる可能性も想定出来るのだ。

ここからさらに、二作目、三作目における双子のあり方を見ていくことにする。クリストフは二作目、三作目で容赦のない嘘を展開しつつ、『悪童日記』が真実でないことを暴露した。『悪童日記』の結末で双子は別れ、クラウドは国境を越え、リュカはおばあちゃんの家に残った。二作目『ふたりの証拠』ではクラウドが旅立った後リュカのK市での生活が三人称で語られる。そのリュカは第七章で失踪し、第八章で入れ替わりに帰ってきたクラウドはリュカの残した「大きな帳面」をペーテルから受けとる。だが結末で、第七章まではリュカが書き、残りの第八章をクラウドが完成させたというのは嘘であり、筆跡は一人のものであることが暴露される。双子は実は想像の産物だったというわけだ。

ところが、続く『第三の嘘』ではリュカとクラウドがそれぞれ「私」という一人称の語り手となって、実在する二人の人物として語る。『ふたりの証拠』の結末から引き継がれたように、クラウドが警察に拘留されている場面から始まる。ところが、話が進むにつれ、クラウドはリュカであることが分かる。そして、クラウドは Klaus と綴られ、それまで Lucas と Claus というアナグラムで示されていた双子の親密さが失われる。そして、クラウドは訪ねてきたリュカに自分は双子の相手ではないと言い、帰してしまう。リュカの世話人となっていた大使にリュカを本当の双子ではないと言いながらも、クラウドはリュカを父親の墓の隣に埋葬する。終に双子が実在したのかどうか解らないまま物語は幕を下ろすのだ。題名が示唆するように、『第三の嘘』も真実を語っているとは断言できないと考えるならば（そもそもフィクションに真実を求めるのも奇妙な話だが）、双子についての三つの物語は一つの主題の変奏でしかないと考えないわけにはいかなくなる。双子のあり方をもとにするだけでは袋小路にはまり込むようなものであり、ここから先には進めない。

### 3. 漂泊する《Le Grand Cahier》

ただ、ここまでの読みは物語の表層に留まっているに過ぎない。さらに分析を続けていくためには、双子三部作が見分けのつかないように語っている別の層の物語に潜り込まなければならない。マリー＝ノエル・リボニ＝エドム Marie-Noëlle Riboni-Edme はその著書『アゴタ・クリストフの三部作』*La trilogie d'Agota Kristof*の中で三部作に逆から光を当てている。つまり、『第三の嘘』で述べられる nous を踏まえて、先行二作の双子を考察していくのだ。『第三の嘘』の第二部でクラウス (Klaus) が双子の真実の種明かしをしている中で、まだ別れていなかった双子の状態が述べられている。「ぼくらは何もこわくなかった Nous n'avons peur de rien」(LTM, p. 112)。このように感じられるほど、双子にとって二人でいるとは理想的な状態だったのである。その状態が母の銃弾によって損なわれる。リュカは脊髄に兆弾を受け、病院に運ばれるのだ。それ以後、双子は別々の人生を歩むことになる。この始まりの「ぼくら」が損なわれて一人として生きていかなければならなくなったことに注目し、双子の物語の成立を考えていくというのである<sup>5)</sup>。

このリボニ＝エドムの読みを踏まえて、『第三の嘘』第一部冒頭のリュカの言葉から書くことの意味を確認したい。リュカは文房具店の女主人から何を書いているのかと問われ、以下のように答えている。

本当の話を書こうとしているが、ある瞬間に、話というものはその真実によって耐え難いものとなる、それ故変えなければならない、ということを彼女に答える。私は自分の話を語ろうとしている、しかしそれが出来ない、私には勇気が欠けているし、その話は私を傷つけるのだ、と彼女に言う。だから、すべてを美化し、物事を起こったようではなく、こうであって欲しかったと思うように書く。

Je lui répons que j'essaie d'écrire des histoires vraies mais, à un moment donné, l'histoire devient insupportable par sa vérité même, alors je suis obligé de la changer. Je lui dis que j'essaie de raconter mon histoire, mais que je ne le peux pas, je n'en ai pas le courage, elle me fait trop mal. Alors, j'embellis tout et je décris les choses non comme elles se sont passées, mais comme j'aurais voulu qu'elles se soient passées. (LTM, p. 14)

また、クラウス (実はリュカ) は国境を越えた後のことを回想しているが<sup>6)</sup>、その中で後見人となってくれたペーテルに自分の帳面の内容について語っている。「何が書かれているのか知りたくて仕方ないよ。日記か何かなのかい? Je suis vraiment curieux de savoir ce que contiennent ces cahiers. Est ce une sorte journal ?」とペーテルに問われ (LTM, p. 84)、クラウスは「作り事です。本当ではないけれど、そうでありうるような話です Des choses inventées. Des histoires qui ne sont pas vraies, mais qui pourraient l'être」と答えている (LTM, p. 84)。これらの言葉から分かるように、リュカが書いているものは双子の相手との別離

の後に一人で「すべてを美化し、物事を起こったようにではなく、こうであって欲しかったと思うように」書いた「真実ではないけれど、真実でありうるような話」なのだ。自分たちが二人で作り上げていた世界を取り戻す試みとして、双子が主人公の物語『悪童日記』が書かれたのである。三部作をこのようにして考えると、『悪童日記』に内在していた虚構性は『第三の嘘』でのリュカの言葉によって裏付けられ、リュカとクラウドという双子の物語は『第三の嘘』によって収束したと言うことも出来るだろう。

だが、一人になったリュカが書いている話は「作文の内容は真実でなければならない」という『悪童日記』の作文と同一のものなのだろうか。続編である『ふたりの証拠』『第三の嘘』においても、リュカとクラウドの二人がともに過ごし、書き付けたことになっている「大きな帳面 *le Grand Cahier*」は双子を結び付ける重要な品であり、こうした物語の流れに沿えば、それらが同一の物と言えなくも無い。しかし、『ふたりの証拠』『第三の嘘』には双子の片割れが一人で書いたものと『悪童日記』が同じであるという根拠は見当たらないのだ。以下このことを検討していこう。リュカの言うような「こうであって欲しかった」話が『悪童日記』とは言えなくなるのである。

『悪童日記』の最後で双子の片割れクラウドはおばあちゃんが残した金塊やお金、宝石の入ったキャンパス地の袋を持って国境を越えた。上述のように、『ふたりの証拠』はクラウドと離れた後におばあちゃんの家に残ったリュカを描いている。物語が続いているとするならば、前作で双子が作文を書き付けていた「大きな帳面」もおばあちゃんの家にあるはずである。まずはこのように仮定しておこう。その上で、第四章の冒頭でヤスミーヌがマティアスを残して K 市を発った後（実はリュカによって殺害されたことが後に明らかとなる）、リュカとマティアスが二人で屋根裏部屋に上る場面を見てみよう。マティアスが大箱の蓋を開け、数冊の大きな帳面を発見する。そこでリュカは蓋を閉めて、「何でも無い。ああ助かった！ありがたいことにお前まだ字が読めないんだったな。」と言っている（LP, p. 89）。『悪童日記』に描かれているのと同様、他人の目に付かないように屋根裏部屋に隠されていることから、ここでの「数冊の大きな帳面」には双子の作文が書かれた *le Grand Cahier* も含まれていると考えられる。

リュカは成長するにつれ字が読めるようになってきたマティアスに帳面を読まれないと考え、帳面をペーテルに預けようとする。リュカが帳面を屋根裏部屋から持ち出す場面は「彼は帳面を全部箱から取り出し、黄麻の布で包んでから出かける *Il prend les cahiers dans le coffre, il les emballe dans une toile de jute et s'en va en ville*」であり（LP, p. 91）、箱の中の全ての帳面を持ち運んでいる。そして、リュカが持ってきた帳面を見て、ペーテルは「メモだって！分厚い帳面が六冊もあるじゃないか *Des notes! Une demi douzaine de cahiers épais*」と言っており（LP, p. 92）、大箱の中の全ての帳面は六冊だったことがわかる。

そして、ペーテルから誰にも読ませないようにする唯一の手段は燃やすことだと言わ

れ、リュカが次のように答えていることにも注意したい。「とっておかなくてならないんです。クラウドのために。これらの帳面はクラウドに向けられたものなんです。彼だけにね *Je dois les garder. Pour Claus. Ces cahiers sont destinés à Claus. A lui seul*」(LP, p. 93)。

六冊の帳面の中に双子が二人で書いた作文も含まれているとするなら、クラウドのためにとっておくというのはわかるが「*Ces cahiers sont destinés à Claus*」という言葉は奇妙である。なぜなら、『悪童日記』の内容である二人で書いた作文をわざわざ「向けられたもの」と言うとは考えにくいからだ。さらに、この場面でクラウドと連絡を取っていないのかとペーテルに聞かれ、リュカは「ぼくは彼に向けて毎日ノートに書いています。彼もきっと同じようにしているに違いありません *Je lui écris tous les jours dans les cahiers. Il doit certainement faire de même*」と答えている (LP, p. 94)。この発言も踏まえると、「毎日ノートに書いてい」る内容は互いに離れている相手への近況報告として考えられ、クラウドに向けられたという上述の言葉とも合致する。これらを突き合わせると、クラウドに「向けられたもの」は一人になった後のリュカの書いたもの(『ふたりの証拠』の物語内容)しか指さず、マティアスに読まれないようにしようとした *Ces cahiers* にはクラウドが国境を越えて以後の出来事しか記されていないことになる。つまり、リュカの所持している全ての学習帳の中身には二人で書いた作文(『悪童日記』の物語内容)は含まれておらず、『ふたりの証拠』の第七章までの内容しか書かれていないとも読めるのだ。こうなると、二人の作文が『ふたりの証拠』で屋根裏部屋の大箱の中にあっただのかどうか分からなくなる。

さらに、第八章でK市に帰ってきたクラウドに、ペーテルはリュカが残した帳面を渡す。「ペーテルは住居に上がって行き、ちょっとしてから五冊の大きな帳面を持って降りて来る」(LP, p. 176)。ここで帳面は「五冊」になっている。

そして、最後の部分である「K市当局がD大使館向けに作成した調書」の中では以下のように述べられている。「我々は当然の事ながら、治安上の理由により、クラウド・Tの所持していた原稿を検討した。この原稿により、彼は兄弟リュカの存在を証明出来ると主張する。また、リュカが原稿の大部分を書いたのであって、同人、つまりクラウドは、最後の数ページ、すなわち第八章を書き加えたに過ぎないとしている *Nous avons naturellement, pour des raisons de sécurité, examiné le manuscrit en possession de Claus T. Il prétend, par ce manuscrit, prouver l'existence de son frère Lucas qui en aurait écrit la plus grande partie, lui même, Claus, n'ayant ajouté que les dernières pages, le chapitre numéro huit*」(LP, p. 187)。ここでは「帳面 *cahier*」ではなく、「原稿 *manuscrit*」になっている。たしかに「原稿」が「帳面」を含んでいると言えなくもない。それよりも重要なのは、この箇所の「同原稿の大部分」というだけではそれが『悪童日記』の内容も含んでいるかどうかははっきりわからないということである。リュカが書いた内容は『ふたりの証拠』の第七章までだと、クラウドが主張しているとも読めるのだ。こうして、『ふたりの証拠』の中で「大



きな帳面」は六冊から五冊となり、終いにはノートなのかどうかもわからず、それが含む内容もはっきりしなくなる。

次に『第三の嘘』では「大きな帳面」がどのように現れているか検討する。先に引用した国境を越えた時の回想の中で、クラウドはペーテルに自分が持ってきた帳面を見せる場面では「彼らは青少年の家の部屋にいる。クラウドは古いマントを縛っている紐を解く。彼は五冊の学習帳をテーブルの上に置く *Ils sont dans la chambre de la maison de jeunesse. Claus défait la ficelle avec laquelle est attaché son vieux manteau. Il pose cinq cahiers d'écolier sur la table*」である (LTM, p. 84)。『悪童日記』の最後で国境を渡る時、クラウドは帳面を持っていなかったことは既に確認したとおりである。だが、ここでは帳面を持っていることになっており、それらは五冊である。さらに第二部でリュカがクラウド (Klaus) を訪問する場面では「彼は書類カバンを開け、一冊の大きな学習帳を取り出し、テーブルの上に置く *Il ouvre sa serviette, il en sort un grand cahier d'écolier qu'il pose sur la table*」となっている (LTM, p. 103)。第一部でリュカがペーテルに見せた帳面は五冊だった。ところがこの場面では一冊である。

そして、最後の場面のクラウドの言葉を見てみよう。「リュカは戻ってきて、また発った。私が追い返したのだ。彼は私に未完成の原稿を残して行った。私は今それを完成させつつある *Lucas est revenu et il est reparti. Je l'ai renvoyé. Il m'a laissé son manuscrit inachevé. Je suis en train de le finir*」 (LTM, p. 161)。

本文の最後の場面で「完成させつつある」と語られていることを踏まえるなら、「一冊の大きな学習帳」に含まれているのは『第三の嘘』の内容を為す事柄だけであり、『悪童日記』に書かれていたような双子の話が含まれてはいない、と考えることもできる。国境を越えた 15 歳の時点でリュカがペーテルに見せた五冊の帳面には『悪童日記』で描かれていたような双子の話が書かれていたのだろう。だが、第二部で 55 歳のリュカはそれらの帳面をクラウドに残さずに死んでしまう。五冊の学習帳の所在は不明のまま物語は終わる。ここまで見てきた『ふたりの証拠』『第三の嘘』における帳面の揺れ動きや行方不明を踏まえると、『悪童日記』の内容となる双子の作文の存在そのものが漂泊し始める。実は『悪童日記』は書かれていなかったのかも知れない。

#### 4. 作文という分析

これまでの精読によって『悪童日記』を書かれていないものとして読む可能性も浮上してきた。三部作の物語内容から実在性を否定する根拠を探り当てても、現実には『悪童日記』という書物が存在しているということは否定できない。現実とフィクションの狭間で厄介な問題が生じている。この『悪童日記』とは何なのだろうか。

それについて考える前に、これまでのことを一度整理しておく必要がある。双子として生を享け、「ぼくら」として生きてきた人物が突然双子の片割れから離されて独りにな

り、つらい現実と向き合うために「物事を実際にあったとおりにではなく、こうあってほしかったという思いにしたがって」書く。これが『ふたりの証拠』『第三の嘘』で述べられている書く行為だった。このリュカの言葉を額面どおりに受け取るならば、帳面に書かれた内容は想像的なものであるということになる。こうした意図を持って、一人になった双子は『悪童日記』の物語を書いたのかもしれないし、実は書いていないのかもしれない、というのがここまで確認してきたことだった。

上記のリュカの言葉を一先ず承認して、さらに先に進もう。しかし、すぐに壁にぶつかることになる。書くという行為が「物事を実際にあったとおりにではなく、こうあってほしかったという思いにしたがう」とするなら、『悪童日記』には疑問を抱かざるを得ない箇所が幾つも見受けられる。なぜ、両親は死に、母親は別の男との間に女の子をもうけており、双子は母と妹の遺骨を磨いて屋根裏に飾るのだろうか<sup>7)</sup>。これらのことも「こうあってほしかった」出来事なのだろうか。

東浦弘樹はこのことについて以下のように述べている。『ふたりの証拠』のリュカは、マチアスの自殺直後、悲しい現実から眼をそらすため、ノートに「マチアスに関しては、全とうまくいっている」と嘘を書いている。だが、そのような絵空事は、ほんのいつとき夢を見せてくれるとしても、長くは続かない。長続きする「物語」をつくるには、現実を否定するのではなく、現実をありのままに描きながら、そのもつ意味を変える、あるいは大筋においてはありのままの現実を描きながら、細部において現実を作り替える必要があるだろう。そこにこそ「現実の美化」と「事実の忠実な描写」の接点がある<sup>8)</sup>。

確かにこの議論は『第三の嘘』でリュカが述べていた書くことの意義と一致しており、『悪童日記』の辛い出来事の説明には有益である。だが、このリュカの言葉は「本当」なのだろうか。『第三の嘘』の言葉もまた一つの嘘かもしれないのだ。ここまで「嘘」の可能性を掘り下げてきたことで、リュカの言葉に根拠を求めた読解が難しくなっている。だが、普段意識されていない欲望が嘘（冗談）によって顕在化すると考えるなら、嘘を根拠にして話を進めることもできるはずである。

リュカが「嘘」を書いているという東浦の引用していた箇所をもう一度みてみたい。そこから、リュカとクラウス二人の物語を読み直していこう。『ふたりの証拠』第七章でマチアスが自殺した後にリュカが帳面に書いている場面である。「リュカは帰る。彼は机に向かい、子ども部屋の扉が閉まっているのを見る、学習帳を開き、書き込む。『マチアスに関しては、すべて上手く行っている。いつも学校では一番で、もう悪夢をみることも無くなった。』 Lucas rentre. Il s'assied à son bureau, regarde la porte fermée de la chambre de l'enfant, ouvre un cahier d'écolier, y écrit : « Pour Mathias tout va bien. Il est toujours le premier à l'école et il ne fait plus de cauchemars. » (LP, p. 170)。

リュカはマチアスについての「こうであって欲しかった」ことを書いている。三部作を通して、明らかな嘘を帳面に書きこんでいるのはこの箇所が初めてである。この場

面を読み、読者はここで「作文の内容は真実でなければならない」という作文のルールを思い出しながら、これまでの物語に「嘘」が紛れ込んでいる可能性を感じ取るかもしれない<sup>9)</sup>。そして、リュカが書いた部分とクラウドが書いた部分は実は同一人物の筆によって一気に書かれたものだったという結末の仕掛けにより、嘘を決定的に思い知らされるのだった。しかし、ここで注意しなければならないのはリュカが帳面に「直接書き込んでいる」ことである。『悪童日記』での二人の作文のルールをもう一度見てみよう。

二時間後ぼくらは紙を交換し、辞書を使いながらお互いに相手のつづりの間違いを直す。そして紙の下の部分に「良」または「不可」と書く。もし「不可」なら、ぼくらは作文を火に投げ込み、次の練習の時間に同じ主題に挑戦する。「良」なら、その作文を「大きな帳面」に清書することができる。

Au bout de deux heures nous échangeons nos feuilles, chacun de nous corrige les fautes d'orthographe de l'autre à l'aide du dictionnaire et, en bas de la page, écrit : « Bien », ou « Pas bien ». Si c'est « Pas bien », nous jetons la composition dans le feu et nous essayons de traiter le même sujet à la leçon suivante. Si c'est « Bien », nous pouvons recopier la composition dans le Grand Cahier. (LGC, p. 33)

双子は作文を帳面に直接書き込まず、下書き用の紙に書いている。そして、互いが相手の書いたものを読み、訂正し、「良」であればその作文を「大きな帳面 le Grand Cahier」に書き付けることが出来るのだった。書いた作文を交換することは当然のことながら相手に内容を読まれることを意味するということだ。この取り決めを単なる学習の一環として読んではならない。『悪童日記』での双子が書くものは真実を装った「これから起こること」だったのを思い出してほしい。これを踏まえると、次のように考え進めることが出来る。もはや通常の作文とは言えない、この相反し矛盾する書記行為は二人の欲望を表出するとともに、普段意識されないものを意識によって知覚できるようにする為のものであると考えられる。なぜなら、自分の中にあるものを言語化する「書く」という行為は無意識的なものを意識するために必要な行為だからである。つまり、事物表象と語表象とを結びつけ、前意識的なものとすることにより、抑圧され無意識<sup>10)</sup>となった欲望を意識化するのだ。このように「書く」行為をとらえるなら、双子が互いの作文を交換して読むとは、相手の無意識の欲望に辿り着こうとする試みであると読みかえることが出来る。双子の相手とは読み、且つ読まれるものでもあるのだ<sup>11)</sup>。

これを足掛かりにして、もう一度『悪童日記』を読み直す作業に着手しよう。双子は物語前半に何かにつけて「練習 exercice」を行っていた。痛みあるいは餓えに耐えるための身体面の鍛錬、または、言葉の重みあるいは残酷な行為に耐えるための精神面の鍛錬と多岐に亘っている。その中でも、特に注目したいのは「精神を鍛える Exercice

d'endurcissement de l'esprit」と冒頭でも少し触れた「盲と聾の練習 Exercice de cécité et de surdit  」である。まずは「精神を鍛える」から始めよう。精神を鍛える為  二人は言葉を幾度となく繰り返し、その言葉から意味を抜き取ろうとする。向かい合って座り、互いに罵りあうのだ。しかし、母が身近に居ない今もう誰も言ってくれない言葉を忘れる為  、母が昔言っていたという言葉も互いに言いあう。ここで「お母さんは僕らに言っていたものだ Notre M  re nous disait」として、「私の愛しい子たち！私の天使たち！私の喜び！私の大好きなおちびさんたち！Mes ch  ris！Mes amours！Mon bonheur！Mes petits b  b  s ador  s！」と母の言葉を思い出しているものの、二人が互いに言い合うのは「私の愛しい子たち！私の天使たち！愛しているわ…絶対離さない…他の誰も愛さない…いつまでも…私の人生の全て…Mes ch  ris！Mes amours！Je vous aime… Je ne vous quitterai jamais… Toujours… Vous   tes toute ma vie…」である（LGC, p. 27）。双子は母の言葉として同じものではなく、母が言ったかもしれないものを繰り返しているが、この「愛しているわ…」以下の意味を抜き取ろうとして、双子がわざわざ向かい合って互いに言い合っている事に注目したい。

次は「盲と聾の練習」について見てみよう。双子は一方が盲人役となり、もう一方は聾者となり、二人は文の中でこれまでのように「ぼくら」ではなく、それぞれ別々に「盲人」「聾者」として弁別されるのだ。そして、この練習は「警報が出されて人々が地下壕に隠れ、通りに人影が無くなった頃、ぼくらは手をつないで、散歩に出かける Nous nous donnons la main, nous allons nous promener pendant les alertes, quand les gens se cachent dans les caves et que les rues sont d  sertes」のように（LGC, p. 41）、人々が地下壕に自分たちを隠している最中、それらの人々とは対照的に行われる。盲人は耳で聞いた事をゆっくりと話し、唇を読ませることで聾者に伝え、聾者は目で見た事を盲人に語って聞かせている。警報が発令されて人気の無くなった通りで、双子が手をつなぎ二人で一人の人間を演じている所は誰にも見られない。例外は一人の男だ。みすばらしく老いぼれた男が双子の方を見るが、双子の聾者役は「僕には彼の眼の色が見分けられない Mais je ne peux pas distinguer la couleur de ses yeux」と言う（LGC, p. 42）。男の人種が分からないというだけでなく、男には眼球が無いかもしれないことも示唆されているのだ。二人で一人になった双子の様子は誰にも見られてはいない。

そして、物語も半ばにさしかかった頃、二人は戯曲を書き、上演している。それが書かれている「芝居 Th   tre」の話も見てみよう（LGC, pp. 99-100）。金持ちと貧乏人の二人しか登場しない筋書きで、金持ちは仕事を済ませた貧乏人を家から追い返して、一人で食事を取りたいが、腹を空かせた貧乏人は何か食べるものを貰おうとして、なかなか立ち去らない。主人と奴隷の弁証法的関係のように、金持ちと貧乏人はその関係を逆転させようと同時に、自らの存在の為に互いに他を必要とするものでもある。しかし、この作中劇では、双子のどちらかが扮する金持ちが貧乏人を家から蹴り出すのだ。

このようにして、『悪童日記』は物語後半の家族の物語に進んで行く。既に述べたように両親は死ぬが、またおばあちゃんも死ぬのだ。作文が「これから起こること」を思いのままに書くものであったことを思い返すなら、双子は母を、おばあちゃんを、父を順に葬って行くとも言える。ここで「おばあちゃんの病気 *La maladie de Grand-Mère*」の話を見ておきたい。おばあちゃんが脳卒中でベッドから起きてこない朝、双子はおばあちゃんを救うべく、医者を呼びに行くが、「ぼくらのうち一人がおばあちゃんの側に付いていて、もう一人が医者を探しに行く *L'un de nous reste près d'elle, l'autre va chercher un médecin*」のだ (LGC, p. 155)。これまで二人が「ぼくら」ではなくそれぞれ示されることはあっても、互いの視野から離れて別々に行動する事は無かった。物語前半の「学校」の話では二人が学校に通い始める時、別々のクラスになった事で、気を失ってしまう様子が語られていたが (LGC, p. 29)、ここで双子は別々に行動できるようになった自分たちの姿を描いているのだ。そして、二度目の発作が起こった時、双子はおばあちゃんから言いつけられていたように (LGC, p. 156)、毒によって安らかな死を与える。こうして次々に身内を葬り去り、双子はついに最終話「別離」によって、父を殺し、残った肉親は自分たちだけとなる。それで次に殺すのは自分の分身とも言うべき、双子の相手の存在しか残されていない。

こうして漸く、双子はこれまで抑圧されていた自らの無意識の欲望にたどり着く。双子は父が地雷を踏んで倒れた後、国境を越えるものとおばあちゃんの家に残るものとの別れるのだった。結末でのこの唐突に見える別れは、実は双子が「書く」ことを通じて、少しずつ明らかにして来たものの帰結であったのだ。それは「双子としての自分ではなく、一人になりたい」という願望である<sup>12)</sup>。『第三の嘘』で述べられていた「何もこわくなかった」という元の双子の状態を取り戻すために、「物事を起こったようではなく、こうであって欲しかったと思うように書」いていたのではなかった。そして、双子にとって真実の探求が書かれていたという意味で、『悪童日記』での「作文の内容は真実でなければならぬ」という決まりは嘘ではなかったのである。

「本当は一人になりたい」という欲望を明らかとした今、双子が相手の書いた内容を「訂正し」「『大きな帳面』清書する」として潜在内容が検閲・加工されてから顕在内容として夢に現れることとの類似、また、超自我が自我を監視しているという局所論をも参照したい。こうすることで、先に引用した『ふたりの証拠』でリュカが帳面にマティアスについての嘘を直接書き込んでいる場面が別の意味を帯びてくる。つまり、一人となったリュカがフィクションを直接帳面に書き込めるのは相手による検閲がなくなったことを表しているのだ。また、『第三の嘘』の第一部でリュカが過去を回想し、「こうして、私は紙、鉛筆、消しゴム、そこに私の初めての嘘を記すことになる一冊の大きな学習帳を買うことが出来た *Ainsi j'ai pu acheter des feuilles de papier, un crayon, une gomme, et un grand cahier dans lequel je notais mes premiers mensonges*」と言っているのも同様である

(LTM, pp. 48-49)。

ここで『ふたりの証拠』のヴィクトールが書いていることにも目を向けておこう。ヴィクトールは作家になるという夢を諦めきれず、執筆のための環境を手に入れようと、書店をリュカに売り、姉と共に暮らす。しかし、自分の文章は一行も書けず、彼は次第に酒と煙草に溺れるようになる。そして、弟の本を心待ちにしていた姉は弟の墮落ぶりを咎め、次第に姉弟関係は悪化し、結果ヴィクトールは姉を絞め殺す。その後、彼はそれまで何も書けずにいたのが嘘のように、執筆を開始した。自分を監視していた姉がいなくなることによって、彼は書けるようになったのである。これは裁判での彼の言葉「ああしないと、姉を殺さないといけなかった、それが本を書く為の唯一の解決方法だったんです」からも明らかである (LP, p. 153)。彼の執筆は干渉してくる他者の存在を排除した上でなければ成立しなかったのだ。だが、ついに書き始めたヴィクトールが自分の身に起こったことしか書いていないことに着目したい。そして、彼は死刑判決を受け、処刑される。ここでもう一人書いていた人物として『ふたりの証拠』のマティアスにも触れておく。リュカが勧める以前からマティアスは書いていた。「ぼく、もう書いているんだよ。全部書いたよ。ここに引っ越してから起こったこと全てをね。悪夢、学校のこと、全部さ Je l'ai déjà écrit. J'ai tout écrit. Tout ce qui m'est arrivé depuis que nous habitons ici. Mes cauchemars, l'école, tout」 (LP, p. 133)。この言葉から、マティアスもまた嘘を書いているのではなく、事実を書いていると分かる。そんなマティアスも自殺してしまう。フィクションを書かなかったものは死ぬのだ。そして、自らのフィクションを書いたリュカは生き残る<sup>13)</sup>。

ここまでの考察をまとめたい。『ふたりの証拠』と『第三の嘘』での双子の不確かな存在様態を踏まえると、双子の「書く」行為について以下の様な二通りの帰結を考えることが出来る。リュカあるいはクラウドという名前の一人の男が辛い現実と向き合う中で、自己の内部に存在する他者性をもとにして自分が双子であり一人ではなく仲間がいると妄想するようになったが<sup>14)</sup>、その習慣から自由になれず日常生活が困難になっていたため、作文を書くことで自らの無意識を探り、解放に向かおうとしていたのだと考えられる。あるいは、双子なのは事実だが、作文を書き始めることによって、常に自らの意識に付きまとい干渉して来る双子の片割れから自由になりたいという無意識の欲望が可視化した。作文というフィクションに囚われることにも繋がり、結果として自分が双子なのかどうか分からなくなったのだとも考えられる。

これらを総合すると、フィクションあるいは嘘を書き始めることによって、自己を探求しつつ自己を喪失する双子の姿が現われる。三部作をここまで辿って来た我々はここでもう一度振り出しに戻った様なものだ。結局嘘に嘘を重ねる物語に翻弄されただけなのかもしれない。しかし、クリストフという一人の作家の創作行為を考察する為には他に道は無い筈である。まだ話を続けたいが、続きはまた別の機会に。

## 注

- 1) 原文の引用は題名を省略した。LGC : *Le Grand Cahier* (Éditions du Seuil, « Points », Paris, 1986). LP : *La Preuve* (Éditions du Seuil, « Points », Paris, 1988). LTM : *Le Troisième Mensonge* (Éditions du Seuil, « Points », Paris, 1991). また、本論文での引用は全て拙訳であるが、堀茂樹による邦訳『悪童日記』ハヤカワ epi 文庫、2001年；『ふたりの証拠』堀茂樹訳、ハヤカワ epi 文庫、2001年；『第三の嘘』堀茂樹訳、ハヤカワ epi 文庫、2002年）も参照した。
- 2) 双子がどちらかはっきり分かる形で書き分けられるのは物語の最後まで待たなければならない。その時でも双子は *l'un de nous s'en va dans l'autre pays* と *celui qui reste* として示されるだけであり、名前はまだ無い。(LGC, p. 168)
- 3) 邦訳者である堀茂樹は原作の文体について以下のように述べている。「作中人物についてもその他の事象についても、客観的の真実であることを確かめられるようなこと、すなわち事実だけを、思い入れや価値判断やいっさいの解釈を抜きにして記す。その結果、彼女のテキストにおいては、事象はいかなる形においても主体の内部に呑み込まれることのない客体である一方、作中人物は、ある感情の束でも、ある観念の化身でも、ある心理状態の形象でもなく、したがって所与の事態に対する行動以前には無であって、まさに自由な主体としての行動によってのみ自己のアイデンティティーを定義し、更新していく存在として表れる。」(『悪童日記』「解説 (訳者あとがき)」、ハヤカワ epi 文庫、2001年、p. 296)
- 4) 通常は見たこと、聞いたこと、したことを書くものであり、過去形として訳出したくなるだろう。堀茂樹訳では「ぼくらが記述するのは、あるがままの事物、ぼくらが見たこと、聞いたこと、ぼくらが実行したこと、でなければならない」となっている(『悪童日記』p. 42)。
- 5) Le « nous », *Métaphore d'une Division, La trilogie d'Agota Kristof*, pp. 105-121.
- 6) 『第三の嘘』第一部でリュカが国境を越えた時のことが述べられている部分を見てみよう。それはこのように始まる。「*L'enfant traverse la frontière* 子どもが国境を渡る」(LTM, p. 76)。それまで一人称で語られてきた回想がこの時突然三人称となる。国境警備兵からペーテルに身柄を引き取られ、日記の話をするまでの9ページに渡っている (LTM, pp. 76-84)。これはクラウド (本当はリュカ) が外国にいる時の場面である。この場面も『ふたりの証拠』同様に視点はほぼクラウドに置かれているが、語り手による報告と直接話法による人物の発言によって構成されており、出来事を客観的に描写しようと努めているといえる。
- 7) 金杉恭子は『悪童日記』を「反父権ゲームの空間」として、母の死は双子が父権的母性神話を否定したことによると言う。さらに、双子が母子の骸骨を掘り起こしニス塗って復元するという作業は「母性愛の嘘を解体」することであると述べている。また、金杉は語り手である双子について以下のように述べている。「二人でいることの強さ、この子たちの素晴らしさ、目の覚めるような力は、ある特異な構造を持った自己の力であり、それは内部と外部が自由に交換される自在さから来るように見える。二人の間には、父権的母性愛が果たしえない恒

常性、対等性があり、保護／被保護の権力関係やメロドラマのない愛の姿がある。一種のユーロピックな共同体とでも言ったらいいだろうか。」(金杉恭子「アゴタ・クリストフ「大きなノート」—反父権制ゲームとしての物語」『広島修大論集 人文編』第35巻第1号、広島修道大学人文学会、1994年、pp.135-160)

- 8) 「母は死すべし、父は死すべし—アゴタ・クリストフの『悪童日記』」『人文論究』57(1)、2007年
- 9) 『ふたりの証拠』は三人称で書かれているが、直接話法による人物の発言と語り手による状況の描写のみで成り立っており、語り手は全知の語り手のようには振舞っていない。このため、読者の知覚はほぼリュカのものに限定されている。
- 10) これに少し説明を加えておく。抑圧とは自己の内的衝動(欲動)を意識に上らせないようにするための心的機制の一つであり、その動機と意図とは不快をさけることである。外的な刺激作用が問題である場合、その作用から逃避すればよいが、自己の内的衝動(欲動)からは逃れられない為、その欲動が満たされないという不快から逃れるために抑圧が起こったと考えられる。そして、抑圧されたものは無意識の一部となって、普段は意識されない。しかし、その無意識とは健康者の失錯行為や夢、患者の精神症状、強迫現象などから事後的に存在を仮定できるものである。(S・フロイト「抑圧」「無意識について」『フロイト著作集6 自我論・不安本能論』、人文書院、1970年参照。)
- 11) ヴァレリーは考える為には二人でなければならないと述べ、人間の思考が極めて対話的であると述べていた。どちらがどちらなのか解らない双子のあり方はこの内言の対話性と重なり合うとも言えるだろう。(立川健二・山田広昭『現代言語論』、新曜社、1990年)
- 12) 実は、一人になりたいという欲望については既に語られていた。『ふたりの証拠』ではリュカとクラウドによって(本当は同一人物かもしれないが)、二人が別々になることは必要だと繰り返されている。リュカは「それにぼくらお互いを必要とせずに生きる事を学ばないといけなかったんです。一人だね」とクララに言い(LP, p. 65)、クラウドも「ぼくらは決心して別々になったんです。別離は完璧なものじゃないといけなかった。国境だけでは十分じゃなく、沈黙も必要だったんですよ」とペーテルに語っている(LP, p. 179)。初めは位置づけに迷うこれら二つの発言は実のところ彼ら(あるいは彼)の欲望を示していたのだ。
- 13) 自分の双子の兄弟を殺すというモチーフは江戸川乱歩「双生児」からも確認できる。この話は強盗殺人で死刑宣告を受けた男がそれまで秘密にしていた双子の兄殺しを教師師に打ち明けるという設定である。この殺人について男は「わたしにいわせれば、兄弟だったからこそ、かえって殺す気になったのです。あなたのご経験がおありですかどうですか、人間には肉親憎悪の感情というものがあります。この感情については、小説本などにもよく書いてありますから、わたし一人が感じていることではないようですが、他人に対するどんな憎悪よりも、もっともつとまらない種類のものです。」と言う。しかし、これは男の告白であり、男は兄殺しの罪で逮捕されたかどうかは定かではない。つまり、兄の実在は不確かなのだ。この話とも想像的な



双子の片割れ殺しの話と読むことが可能である。だが、この男がリュカ、クラウスと違うのは「兄としてのわたしの、その日の日記」しかつけていなかったことである。(江戸川乱歩「双生児」『江戸川乱歩文庫 人間椅子他九編』所収、春陽堂、1987年、pp. 61-81)

- 14) 『第三の嘘』第一部の警部とのやり取りの中で、クラウス(本当はリュカ)は双子の兄弟を現実にはいなかったとも言っている。

## 参考文献

- Kristof, Agota. (2004). *L'Analphabète*, Éditions Zoé, Genève.
- Riboni-Edme, Marie-Noëlle. (2007). *La Trilogie d'Agota Kristof: Écrire la division*, L'Harmattan, Paris,.
- パトリシア・ウォー (1984=1986) 『メタフィクション—自意識のフィクションの理論と実践』 結城英雄訳、泰流社
- 江戸川乱歩 (1987) 「双生児」『江戸川乱歩文庫 人間椅子他九編』 春陽堂、pp. 61-81
- 金杉恭子 (1994) 「アゴタ・クリストフ「大きなノート」—反父権制ゲームとしての物語」『広島修大論集 人文編』 第35巻第1号、広島修道大学人文学会、pp. 135-160
- 川本三郎 (2006) 「母語を奪われた者の悲しみ」アゴタ・クリストフ『昨日』解説、ハヤカワ epi 文庫、pp. 159-165
- 熊田泰章 (2009) 「テキスト外参照性を封じる語り手の声—アゴタ・クリストフ『悪童日記』における拒絶する語り」『異文化・論文編』 通号10、pp. 37-53
- ジェラルド・ジュネット (1972=1985) 『物語のディスクール 方法論の試み』 花輪光・和泉涼一訳、水声社
- 立川健二・山田広昭 (1990) 『現代言語論』、新曜社
- 多和田葉子 (2003) 『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』 岩波書店
- 土屋勝彦編 (2009) 『越境する文学』 水声社
- 東浦弘樹 (2007) 「母は死すべし、父は死すべし—アゴタ・クリストフの『悪童日記』」『人文論究』 57 (1)、pp. 87-104
- 沼野充義、池内紀、池澤夏樹 (鼎談) (1992) 「アゴタ・クリストフの三部作を読む」『文学界』 第46巻10月号、文藝春秋社、pp. 230-249
- ジークムント・フロイト (1900=1968) 「夢判断」『フロイト著作集 第二巻』 人文書院
- \_\_\_\_\_ (1915=1970) 「無意識について」『フロイト著作集 第六巻』 人文書院
- \_\_\_\_\_ (1923=1970) 「自我とエス」『フロイト著作集 第六巻』 人文書院
- 山本明代 (2007) 「ハンガリーの越境作家の経験と作品、その社会的意味—アゴタ・クリストフを中心に—」『人間文化研究所年報』 (2)、pp. 15-18